

は人生わずか五十年と言われたのに、現在は八十歳は人生の通過点と言われるようになった。復員し結婚し金婚式も迎えられたことを心から神仏に感謝申し上げる。

## 満州事変から終戦処理まで

香川県 浮田 信茂

明治四十三（一九一〇）年三月十八日、香川県綾歌郡国分寺町の農家の長男として生まれ、農業学校を卒業し農業に従事していた。昭和六年徴集で中種合格の印を押され、その時は合格になったと大変嬉しかった。仲間は乙種だったので特にそう感じたのかもしれない。

善通寺、第十一師団の輜重兵第十一大隊（後に輜重兵連隊となる）に入営した。その年には満州事変が勃発したので、軍国色がだんだんと濃くなってきたが、都会では金融恐慌、東北地方は冷害のための不作、日

本国中が内外共に不安というか国難ともいえる時期であった。

当時、輜重兵の初年兵教育は半年であったが、教育が終わるか終わらぬうち、第十一師団は満州へと出兵することとなった。

柳条湖で事変が勃発したので、奉天から柳条湖へと張軍と戦った。敵はなかなか強かったが奉天駅のそばに敵の兵舎があり、そこを占領し宿舎にしていた。食糧は内地から送られたが、さつま芋はかますに入れて送ってくるから凍っていた。輜重兵特務兵を連れて駄馬で輸送するので、我々は馬に乗り指揮をとって兵站から前線へと進んで行った。第十一師団の四個連隊は全部出動し、張軍を北支へ追いやって事変は一応終結したので、原隊へ帰還し、現役二年間を務めて満期となり家に帰った。

家は農家で人手が足りなく困っていた。私は長男であったが学校の教員をしていたので、退職し農業に専念をしていた。ところが、昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発したため、昭和十三年に召集さ

れ、丸亀歩兵第十二連隊第二大隊本部付となった。私は馬に乗れるため、命令受領や命令伝達をしていた。

上海の揚子江の河口に夜間上陸し宝山城を占領したのであるが、羅店鎮攻略で、丸亀の連隊は随分戦死してしまった。

私は梶大隊長の下にいたのであるが、中隊長を集め作戦会議中に迫撃砲弾が落ち、大隊長はじめ各中隊長は全部戦死してしまった。私は乗馬の所にいたため助かったのである。その前、我々部隊は坂出港から歓呼の声で送られ御用船に乗った。丸亀から坂出までの間に梶少佐が来られたのだが、敵しくやかましい大隊長であったが戦死されてしまった。

後任の山田大隊長は兵隊を可愛がった。「命を捨てたのでは国のためならぬ。妻子が居るのだから命を持って帰れ」と言われていたが、山田大隊長は後に陸軍大学へ行かれた。私はこの大隊長の下におり、揚子江を遡行し南京攻略戦にも参加したので、当時の写真は全部持っている。

鎮江要塞を占領し、船が六合へ渡り残敵を掃討し、

句容の敵を殲滅し南京攻略戦となるのである。我が歩兵第十二連隊は、南京城の第二軍用門に突入した。蒋介石政府、總統のいた所を攻略し、三カ月ほど南京城外にいた。

一般人の避難民区域を城内に作り、憲兵が警備していて、我々兵隊は城内に入れなかった。避難の一般人は城外へ出さず、食糧は軍が補給していた。逃げる敵は下関<sup>カガシマ</sup>へ、それを機関銃で攻撃し戦死者は多かったようである。

第十二連隊の宿舎は、蔣軍の鉄道監理所（日本でいえば鉄道省か）。我々は、逃げる敵兵を攻撃し多くの戦果を挙げたが、避難民は一切殺していないし、食糧は補給した。三カ月ほどして、御用船が到着し、我々が内地に帰ったのが昭和十三年の春であった。

いよいよ帰還凱旋である。「勝った、勝った」で、皆「日の丸の旗」を振ってくれ、丸亀の歩兵連隊へ帰ったが、家では皆喜んでいて。丸亀に三日おり召集解除となり伍長に任官していた。

しかし、随分多くの人が戦死しているのである。羅

店鎮の戦闘では一個中隊（約二百人）で何人も残らなかった。その時、工兵がクリークの下にトンネルを掘って攻撃した。工兵も偉かったが、歩兵も偉かった。やっと敵が逃げ追撃戦となったのであった。

翌昭和十四年に、再度召集を受け満州へ、ノモンハン戦では第二十三師団（九州）が大損害を受けた。第十一師団に緊急動員が下ったのである。高知、松山、徳島、そして我が丸亀連隊も出発した。

関東軍には小型戦車はあったが数は少なかった。重砲は八頭立ての馬で引っ張っていた。突撃の時は、騎兵が敵の散兵壕を飛び越えて煙幕を張り、その中を歩兵が突撃したのである。私は騎馬伝令であるから、工兵が後方から送って来た板を敷き、その上を馬が行く。ノモンハンには広野であるから遮る物が無く、攻撃されると馬から下り馬が楯となってくれた。しかし、馬は三頭死んだ。私はその馬のお陰で助かったのである。そのため、今日でも馬の供養をしている。

その後、独ソ戦が起こったためか、ノモンハンでの

戦闘は停戦となり内地へ帰って来た。因島で検疫を受け原隊へ復帰し帰宅したが、その時子供は三人いた。ノモンハン事件が継続していたら、私は恐らく妻と三人の子供を残して帰らぬ人となっていたであろう。

昭和十六年七月、関東軍特殊演習という名のもとに、対ソ戦準備……大東亜戦勃発と期を一つにして、大召集があった）で召集され満州へ。部隊は関東軍直轄の架橋第三十一中隊であった（名古屋師団管区が第三十中隊）。

その時、宇品の兵器廠から出た演習用の毒ガス（催涙・クシャミカ）が地下壕に入れて保管してあった物を、牡丹江省へ運搬をした。そのうち、引き続き大東亜戦争となったのであるが、満州勤務は続けられたが、多くの部隊が、内地・南方へと移動していたようである。

私は、昭和十九年三月「内地勤務、原隊復帰を命ず」との命令を受けたので、召集解除となると思っていた。ところが、高松市錦町の「連隊区司令部勤務を命ず」ということとなり、家に帰れなくなってしまっ

た。

その後、空襲となり、その後始末をしなければならなくなった。まさに、内地も、外地も、戦場と同じになってきたことを身をもって味わわされたのである。各地の町は焼け野原となり、気の毒であった。

内地は連合軍上陸、本土防衛の体制を整えるため懸命であった。四国でも「高知から来たら、徳島の方から来たら、塩の江峠で敵を防げ」「高知へ上陸したら、善通寺の南の山、徳島との境の大坂峠で防げ」「周辺の住民はどこそこの学校や寺院へ避難させる」「そのためには兵力がいくらかいるか。それだけの人数を召集せねばならぬ」などの計画をしていたし、まさに戦場さながらであった。

私は鎌田道海少佐の下で勤務していた。空襲で焼けては困るから、書類は全部防空壕に入れたので助かった。八月十五日終戦となったが、すぐ家に帰ることは出来ず一週間ぐらい司令部で勤務を続けた。まさに、終戦後の終戦処理が残っていたからである。

司令部は空襲で焼けたので、終戦の時、司令部の建物は無くなっていった。重要書類は早くから田舎の農家の倉庫を借り疎開させていたため助かった。司令部が空襲で焼けたので終戦の時、上からの命令は一つも来ない。私は軍曹で、兵隊は七、八人いたが、自然解散のような形で帰宅させた。その後世話課に勤務した者もおり、公務員となった人もいた。

軍人の「兵籍名簿」を県庁世話課へ運んだ。その後、県庁が改編になり、住民課から福祉課へ移り、今は「兵籍名簿」を保管しているのである。

戦後五十余年を経過し、兵籍不明の者が沢山おられる。その責任を誰に向けたらいいのか判らない。

戦前、戦中は、外地兵籍簿は、帰還すると連隊区司令部が担当保管をしていたのであるし、出征する時は、兵籍名簿は外地部隊へ渡すことになるはずである。

敗戦となり、外地では「兵籍名簿を焼却せよ」との命令が出されたのである。また、輸送中の部隊が、重

要書類（兵籍名簿等を含めて）ともども、潜水艦や空爆で沈没させられ海の藻屑となり、永遠に不明となつてしまったことは事実である。これがため不利益を被っている人は三百万人を超しているかもしれぬ。

私は、残務整理を一週間手伝ったが、自宅は焼けず、家族は無事であった。しかし、弟達二人は海軍に入り、二人とも戦死してしまつたから、戦没者遺家族でもある。その後は、農業に復帰した。

## 私の満州行脚と外蒙古抑留

佐賀県 藤井繁治

昭和十二（一九三七）年、日支事変が勃発し、私達は毎日のように小学生ながら駅頭まで出征兵士を見送りに行ったものである。そしてまた、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発と同時に世間の緊張は高まり、食料品は配給となり、農家は食糧増産で人手が足りず、米麦の収穫時には学生ながら、よく勤勞奉仕で

農家へ手伝いに行ったものである。

戦争はますます激しくなり、学校教練はもとより、兵営宿泊（三泊四日）、県下の連合演習、昭和十七年には福岡・佐賀・長崎三県連合演習と規模が大きくなり、佐賀・福岡の県境で白兵戦をしたことを思い出す。そして学校では、三月卒業を繰り上げて十二月卒業であった。

私がかねてより「青年よ行け大陸へ行き、広野を拓け」に憧れて、卒業後一カ月しての昭和十八年一月二十九日（私の誕生日）ちょうど十八歳となり、かねて就職が決定していたが、満州国興農合作社へ入社のため渡満することとなった。

小船で関門海峡を渡り下関駅へ、全国から三百人ぐらいが集合し、集団となり関釜連絡船に乗り込む。当時、既に敵潜水艦が内地付近にも出没するというので、魚雷襲撃に備え全員救命袋を渡されたことを思い出す。

夜十時頃、下関港を出発し、翌朝無事釜山に上陸することができた。それから、朝鮮半島を縦断し、満州